研究ノート

岸田吟香『東京日日新聞』台湾出兵記事の発表形式とその内容

−日本初の従軍記者は近代日本初の対外出兵で何を記録したか−

野嶋　剛

明治政府として初の海外出兵である台湾出兵（1874）において、日刊紙『東京日日新聞』の岸田吟香（1833-1904）は唯一の日本人従軍記者として同行取材を行なっている。岸田吟香の台湾出兵報道は、その内容のみならず、発表形式や記事の文体において斬新な点も多く、近代日本の草創期ジャーナリズムの発展に大きな影響を及ぼしたとみられるが、従来のジャーナリズム研究等で検討や考察が尽くされていない部分も多い。本研究ノートは、日本初の従軍記者である岸田吟香が、取材・執筆した内容の全体像を把握することを目的とする。岸田吟香の台湾滞在中およびその前後に『東京日日新聞』で掲載された「台湾信報」と「台湾手稿」という二つの連載の全文を抜き出し、掲載日、文字数、扱い、発信地、内容、記事に添付されたイラストなどを時系列で整理したうえで、初歩的な分析を加えた。

キーワード：岸田吟香、台湾出兵、東京日日新聞、従軍記者、牡丹社事件

１．研究動機と手法

1-1　岸田吟香という人物

岸田吟香（1833-1905）は岡山県美咲町で生まれ、江戸末期から明治期にかけて活躍したメディア人であり、ジャーナリストである。

幕末の横浜で刊行された日本初の民間日本語新聞『海外新聞』にジョセフ・ヒコの助手として参画し、さらに米国人ヴァン・リードとともに『横浜新報　もしほ草』の創刊に携わるなど、幕末・明治初期に立ち上がった日本の近代ジャーナリズム領域で活躍した。日本のジャーナリズム史で「最初のジャーナリスト」として名前が挙がるのは岸田吟香であると言われる（土屋，2017）。

1872 年（明治 5 年）に創刊した『東京日日新聞』に加わり、1874 年（明治 7 年）に行われた台湾出

兵に同紙従軍記者として同行した。

岸田吟香はメディア人、ジャーナリストのほかにも、実業家や文化人など複数の顔を持っていた。日本初の和英辞書である『和英語林集成』の編集において、ヘボン式ローマ字の創設者といて知られるＪ・C・ヘボンの重要な助手として参画している。そのヘボンから教わった目薬調合法に基づき、岸田吟香は目薬「精錡水」を販売して成功を収め、東京・銀座に目薬販売の店舗を開いた。資源や運輸などの事業にも参画し、中国へ渡って目薬販売や図書事業なども経験。東京盲唖学校の創設にも協力している。

一方、岸田吟香が生涯のなかで多種多様な事業に関わっていたことは、その台湾出兵報道に関心が十分に当たらない要因にもなってきた。岸田吟香が台湾出兵から帰国後しばらくしてジャーナリズムの世界から離れ、その従軍報道内容は本人や伝記作家の手でまとめられることもなく、「近代日本初の海外出兵における日本人初の従軍取材」という貴重な岸田吟香の経験は、時の経過とともに歴史の中に半ば埋没させられていた。

1-2　台湾出兵の概要

1874 年の台湾出兵は明治政府による初めての海外派兵であった。発端は出兵の 3 年前にあたる 1871 年（明治 4 年）、台湾で発生した琉球民殺害事件であった。宮古島を出発した交易船が悪天候のため漂流し、台湾南部の海岸に漂着した。乗員 66 人はいったん現地の先住民族パイワン族の集落で保護されたが、うち 54 人が殺害され、生き残った者が琉球王朝に届け出て、事件発生が発覚した。その後、紆余曲折を経ながら、日本政府は台湾への出兵を決断し、陸軍中将・西郷従道率いる遠征軍が台湾に派遣された。

台湾出兵について日本ではほかに「征台の役」「台湾事件」などの呼称がある。一方、台湾では、この琉球民殺害から出兵までの経緯を総称して、出兵先であった牡丹社という先住民族・パイワン族の村の名前をとって「牡丹社事件」と呼ばれる。

当時の日本のジャーナリズムにおいては、ようやく日刊紙が誕生したばかりで、戦争取材に危険を冒して記者を派遣する、といった発想も、本来ならば持ち得ないような初歩的な発展段階にあった。そのなかで、岸田吟香は自らの発案で台湾への遠征軍に同行を申し出た。いったんは軍部の拒否にあったものの、遠征軍の物資調達係となった大倉組の大倉喜八郎の協力を得ることで乗船が認められ、最終的には従軍取材を実現させた（草野、山口，2001）。

従軍取材の成果は、当時自らが編集長を務めていた『東京日日新聞』で「台湾信報」「台湾手稿」という二つの連載記事として発表され、広く注目を集めた。

1-3　研究の動機と手法

筆者は、かつて朝日新聞社海外特派員として 2003 年のイラク戦争で米派遣軍に長期従軍し、『イラク戦争従軍記』（2003，野嶋）という著作を発表している。2019 年に研究職に転じたあと、過去の日本人従軍記者の系譜をたどる調査のなかで、大量の日本人従軍記者が戦場に向かった戦前の日清戦争・日露戦争・日中戦争の以前に、台湾出兵で岸田吟香という従軍記者が存在したことを知った。

加えて、筆者は、ジャーナリズムの立場から台湾問題を専門領域としている。従軍報道と台湾問題を重ね合わすことができるテーマは、自らの専門性や経験を生かすことにもなり得る研究テーマであ

り、岸田吟香の従軍取材を体系的に分析し、研究することが自らに求められていると考えた次第である。

岸田吟香の台湾出兵報道については、主に2000年以降、メディア史・台湾史研究の立場から、草野・山口（2001）、土屋（2005）、陳（2013）などの先行研究が行われている。一方で、戦争報道に対するジャーナリズム研究の視点から岸田吟香の残した報道内容をいかに評価するという点での研究上の蓄積は十分なものとは言いがたく、2024年には台湾出兵から百五十周年という節目となって日本、台湾双方で社会的注目が集まるタイミングを控え、岸田吟香の台湾出兵報道に対する理解の深化を試みてみたい。

今後具体的な研究課題を固めるため、出発点として、岸田吟香の台湾出兵報道の基本データを集約しなくてはならない。その作業の中間報告として、これまでに整理した結果を取りまとめ、簡単な分析を加えることが本研究ノートの主な目的である。

岸田吟香の台湾従軍報道が掲載された『東京日日新聞』から、「台湾信報」と「台湾手稿」の全記事を抜き出し、テキスト化したうえで、文語体が混じっているオリジナルの原文を現代語への翻訳を行なった。そのうえで、オリジナル記事の文字数、発信地、紙面上の扱い、内容の概略などを整理した。画才もあったと言われる岸田吟香は記事に多くの自作イラストをつけている。現地観察のなかで記録したものとみられ、民俗学的に貴重な資料となる可能性があり、その紹介もあわせて行なっている。

連載の号数は未記載のものもあるが、整理の便宜上、号数記載なしを明記し、各記事には通し号数をつけている。原文の文字数は一部解読困難な文字が残った関係で暫定的なものである。現代語訳も最終確定版ではない。「台湾手稿」のタイトル名は連載中に「手稾」「手稿」との両方の表記があるが、文中では「手稿」で統一し、一覧表において分けて記載している。なお、一部の表記は現代の人権感覚にそぐわないものも含まれているが、当時の言語感覚を記録する意味でそのまま掲載している。

２．従軍取材の経緯と分析対象

2-1　従軍した3人のメディア関係者

岸田吟香は『東京日日新聞』の記者だったが、ほかにも台湾出兵には他に2人のメディア関係者も参加していた。フォトグラファーの松崎晋二と、米国紙・ニューヨークヘラルドの東京駐在記者の米国人、エドワード・ハウスである。

台湾出兵においてメディア対応を担当したのは、台湾出兵のために長崎に設置された台湾蕃地事務局で、長官には大蔵卿大隈重信が就き、軍事面での責任者の都督には西郷従道があたった。日本の台湾出兵については、当初、支持の姿勢を見せていた英米両国が出兵直前に消極姿勢に回り、明治政府も一旦出兵中断を決めたが、すでに長崎に集結していた軍勢を率いて、西郷従道が見切り発車的に台湾に出発した。

３人のなかでエドワード・ハウスが先遣隊に同行し、岸田吟香と松崎晋二は長崎で台湾行きの別便の船を待ち、エドワード・ハウスよりも遅れる形で台湾へ出発している。

台湾出兵については、日本新聞で最も積極的に報じたのは、岸田吟香を派遣していた『東京日日新聞』だった。他の新聞社に先駆けて「生蕃事件新聞紙掲載願」を蕃地事務局に提出し、報道の許可を

得た。『東京日日新聞』には、台湾出兵期間中、岸田吟香の現地報道のみならず、「蕃地事務局記録」という欄が設けられ、蕃地事務局の公開情報なども随時掲載された(後藤, 2007)。

岸田吟香が台湾に滞在したのは5月22日から6月22日までで、ハウスや松崎晋二に比べても時間的に短い。しかし、松崎晋二は陸軍雇用の写真師として同行し、ハウスは米国紙向けに記事を書いたので、台湾出兵当時、同時進行的に日本の読者が台湾の従軍報道にアクセスできたのは岸田吟香の記事だけだった。岸田吟香は、台湾への出発前から帰国した後も、旺盛に記事を発表した。台湾の情勢をほぼ独占的に報じた岸田吟香の報道によって、当時は発足したばかりで2千部程度であった『東京日日新聞』の発行部数は一気に1万5000部まで躍進し、その後も新聞界で生き残っていく礎を築いたといわれる。

2-2　分析対象

岸田の台湾報道は、主に二つに分けることができる。前述のように、台湾出兵期間中（長崎出発前を含む）に記述したものと、帰国後に記述したものだ。出兵期間中に書いたものは主に連載「台湾信報」で掲載され、帰国後に書いたものは「台湾信報」と「台湾手稿」で掲載されている。ほかにも岸田吟香は『東京日日新聞』で「台湾誌」という連載も行なっているが、18世紀に台湾に滞在したフランス人宣教師の著作を英訳した本の重訳であるので、本稿の分析対象には含めていない。

3.「台湾信報」と「台湾手稿」の概要

3-1　「台湾信報」を整理したもの

連載番号	日付	新聞号数	発信地	原文文字数	記事大小	内容
1号	4月13日	659号	東京	249字	一段	岸田吟香の東京出発を伝え、編集部より従軍報道について読者に告知している。
2号	5月5日	680号	長崎	470字	一段	4月23日発。長崎の様子。西郷らの軍議。積荷の扱いなどを記述。
3号	5月9日	683号	長崎	408字	一段	4月25日発。長崎の様子や出兵をめぐる軍議、台湾出発の日時が定まらない状況などを紹介。
4号	5月10日	684号	長崎	770字	一段	4月29日発。長崎に向かう船「北海丸」について茂助という水夫が遭難した件。

5 号	5 月 12 日	685 号	長崎	388 文	一段	有功丸の長崎出発を報じる。米英の輸送船を使えないことなど。
6 号	5 月 13 日	686 号	長崎	1074 字	二段	船舶をめぐる混乱で積み込んだ食糧が腐食。大倉喜八郎の「太閤以来の海外派兵」演説を紹介。
7 号	5 月 15 日	688 号	長崎	651 字	二段	台湾の地理環境について詳報。台湾の全図を掲載。地図あり（図 1）
8 号	5 月 16 日	689 号	長崎	850 字	一段	派兵の決定を詳報。主に船員たちの風紀が待たされるなかでやや乱れているが総じて規律を保っていると紹介。
9 号	5 月 17 日	690 号	長崎	1332 字	一段	長崎の衰退を嘆き、長崎、そして九州の地理的優位性について詳細に論じ、日本のアジアへの窓口として発展の潜在性が高いことを論じている。
10 号	5 月 18 日	691 号	長崎	189 字	一段	先行出発した有功丸がすでに長崎に到着したことを報じる。西郷都督はなお長崎待機している。
11 号	5 月 23 日	695 号	長崎	491 字	一段	長崎をすでに出航した有功丸の日程について。長崎からなかなか出発できない焦りも伝わってくる内容。
12 号	6 月 2 日	704 号	長崎	561 字	一段	台湾に先遣隊が到着したことを報じる。明治政府と清朝との交渉で、台湾で先住民が

						暮らす山地が清朝の領土かどうかの議論になっている点を紹介。
13 号	6 月 10 日	712 号	台湾	1885 字	三段	吟香はようやく長崎を出発。船中から書き、台湾から日本へ送ったと思われる。5 月 17 日出発なので一ヶ月近く掲載までタイムラグがある。5 月 22 日に台湾の車城に上陸し、現地の先住民族との戦闘も詳しく描写。従軍取材が本格的にスタートし、戦場に身を置く記者の興奮が筆致から伝わる。イラストあり（図 2）。
第 14 号	6 月 12 日	713 号	台湾	1539 字	三段	先住民の斥候兵を捕まえ損ねたエピソードから始まり、現地の農業、地形、地理を詳細に記している。生蕃と呼ばれる漢化していない先住民の特徴を「マライ人とシナ人を合わせたようだ」と描写。吟香の関心が人類学や民俗学にも向けられている内容。イラストあり（図 3）。
15 号（台湾新聞と誤記。号数なし）	6 月 15 日	716 号	台湾	1598 字	三段	「在蕃某氏より林海軍大佐へ来書」の要約として現地の先住民の一部が「軍門に下る」ことを表明し、西郷都督らと面会した様子を記している。現地ではなお小競り合いが続いていることも書いている。また「ジャパン・ガゼット」や「エキスプレス」など日本の外国紙の抄訳も掲載されている。
16 号	6 月 25 日	725 号	台湾	2049 字	三段	原稿の冒頭に編集部の注記として岸田吟香から送られてきた文書には「公文」と「私

						文」の二種類があることを書いている。「公文」とは、軍当局による戦況解説であり、「私文」とは岸田吟香による戦場記事である。編集部の判断として一面には「公文」を掲載し、同日裏面では「私文」を掲載している。6 月 1 日に軍営を出発した部隊は、5 日にかけて石門に向けて進軍を続けた。険しい地形のなかで行軍に苦しむ様子を描いている。文中では、もう一人の従軍ジャーナリスト、ハウスの名前も登場している。
第 16 号・続	同日裏面		台湾	584 字	一段	先住民の少女についての描写。日本服に着替えさせたことなどが書かれている。日本にこのまま連れて帰られたパイワン族の少女「オタイ」と見られる。
17 号	6 月 26 日	726 号	台湾	2566 字	三段	「歩兵第十九大隊長山田潁太郎少佐」が明治 7 年 6 月 5 日に本陣営にあてた戦況報告と岸田吟香の現地レポートの組み合わせ。内容は、6 月 1 日からの石門への進軍において、岸田吟香が同行し、目撃した内容が中心になっており、迫真の内容である。イラストあり（図 4）。
17 号・続	同日裏面		台湾	527 字	一段	風港の「王媽守」という人物から届けられた現地事情についての内容。
18 号	6 月 27 日	727 号	台湾	3177 字	三段	石門口、風港口、竹社口から三路に分けて牡丹社へ部隊を進めた経緯を報道。「イン

						ド人ジョンソン」や現地人を案内役に集落に入っていくが、険しい断崖や山林を進みながら、先住民勢力の待ち伏せ攻撃を受ける。6月1日から3日にかけての戦闘・進軍の描写が中心になっており、迫真の内容が描かれ、従軍報道の本領発揮の回となっている。
18号・続	6月28日	718号	台湾	1031字	一段	一面に続く従軍の記録。先住民からの攻撃が断続的に続き、部隊は緊張に包まれている。後半には「竹社口進撃指揮長官」の赤松参軍が明治七年六月五日に西郷都督へあてた書状を掲載。
19号	同日裏面		台湾	1232字	二段	猴洞庄の頼勝文という人物が、現地の地理や村の名称などについて詳細に語った内容。後半では現地の生活習慣や住居などについて詳細な観察を記す。
20号（号数なし）	6月29日	729号	台湾	482字	一段	主に、保護された少女オタイについての記述。少女について「耳たぶに二つの赤い玉を繋ぎ、眞鍮環（しんちゅうわ）の腕ぬきをかけている」と描いている。イラストあり（図5）。
17号付属	6月30日	730号	台湾	字なし	二段	紛争の現場となった台湾南部・恒春半島の詳細な地図（図6）。
21号	7月2日	731号	台湾	1257字	二段	地元の「酋長」らとの降伏交渉。岸田吟香は彼らの様子を「酋長は歳わずかに20歳

						ほどで背丈高く、容貌は獰猛にして顔色は銅のようだ。服飾の美しさは酋長のなかで第一で、髪は三つ編みにして頭に巻き、美しい草花を挿して飾りとしている」などと再現している。
22 号	7 月 7 日	726 号	台湾	2265 字	三段	先住民に対する掃討作戦が続くなかで、ある「酋長」が降伏を申し出たことを記述。従軍していた写真家の松崎晋二に石門をバックに写真を撮ってもらったことが書かれている。「ジャパン・ヘラルド」の記事の抄訳も掲載。
23 号	7 月 10 日	739 号	船上	858 字	二段	岸田吟香は 20 日、車城の本営から日本に帰国する有功丸に乗船。岸田吟香は現地でマラリアに罹患した。船はなぜか東回りで北上し、東部・宜蘭の蘇澳を経由し、船上で一泊したのち北部の港湾都市の基隆（当時は鶏籠）へ到着。市内見物も行なっているので、病状はそれほど深刻ではなかったようだ。
24 号	7 月 24 日	751 号	東京	1087 字	二段	岸田吟香が病気のため軍医の勧めで帰国したことが編集部の筆で記されている。長崎で数十日ほど療養し、台湾出発前に「小林某」なる人物に託した現地報告が掲載されている。
25 号	7 月 25 日	752 号	東京	1398 字	二段	帰国後、日本で台湾出兵についての世間の評判が芳しくないことに不満を述べている。苦戦中であるとか、多くの病死者が出ているなどどの風評が流れていたことが

						原因と見られると岸田吟香は指摘している。
26 号	7 月 27 日	754 号	東京	1257 字	二段	「小林某」に託した手紙に書いた記事を掲載。日清の停戦交渉についての内容。
27 号	7 月 30 日	757 号	東京	722 字	一段	「小林某」に託した内容の記事が続く。今回も清朝兵に対する描写で「頭髪は常に三つに編んで後ろに垂らし、笠のように黒く塗った帽子をかぶり、体には白木綿の支那服で黒い縁をつけたものを着ている」と細かく描写。
28 号	8 月 6 日	763 号	東京	825 字	二段	今回の台湾出兵の総括的な内容。「思うに、今回の我が討蕃はこの島がまさに開化に進もうとする第一段階なのだろう」と書く。日本の派遣軍の本営を亀山に築き、住宅などの整備が進んだ点を記述。
29 号（号番なく、「台湾新報」と誤記）	9 月 5 日	790 号	東京	415 字	一段	8 月 13 日に「打狗（高雄）」からの書状に基づく内容を記し、日本軍が本営を置く瑯嶠で英国、ロシア、清朝の船が海岸の周辺で目撃されていると報告。
30 号（号番なく、台湾新報と誤記）	9 月 9 日	794 号	東京	1171 字	二段	台湾に行って戻ってきた「蓬莱社」の「瀧氏」からの情報に基づき、岸田吟香が執筆したと思われる記事。現地情勢は概ね安定していることが述べられている。西郷従道都督と、先住民の酋長らが大宴会を催している詳細な描写。

31号（号番なし）	9月16日	800号	東京	748字	二段	戦闘終了後の台湾の様子が「まったく静かで我が兵隊は何もすることがなく、毎日ただ遊び歩くだけ」と書く。従軍写真家の松崎晋二から手紙が届いたことを記しており、そこでも「山地の蕃地はすべて静謐となった」としている。
32号（号番なし）	9月29日	811号	東京	821字	二段	大倉喜八郎からの書状に基づく台湾現地報告。西郷従道らと大倉らが台南の台湾府を訪れ、城内を散策しながら「偵察」を行なっている様子が報告されている。イラストあり（図7）。
33号（号番なし）	10月7日	818号	東京	660字	一段	台湾信報の最終回。ただ、連載終了を告げることはなく、自然終了の形となっている。現地では兵士の間に疫病が流行っている深刻な事態を記述している。

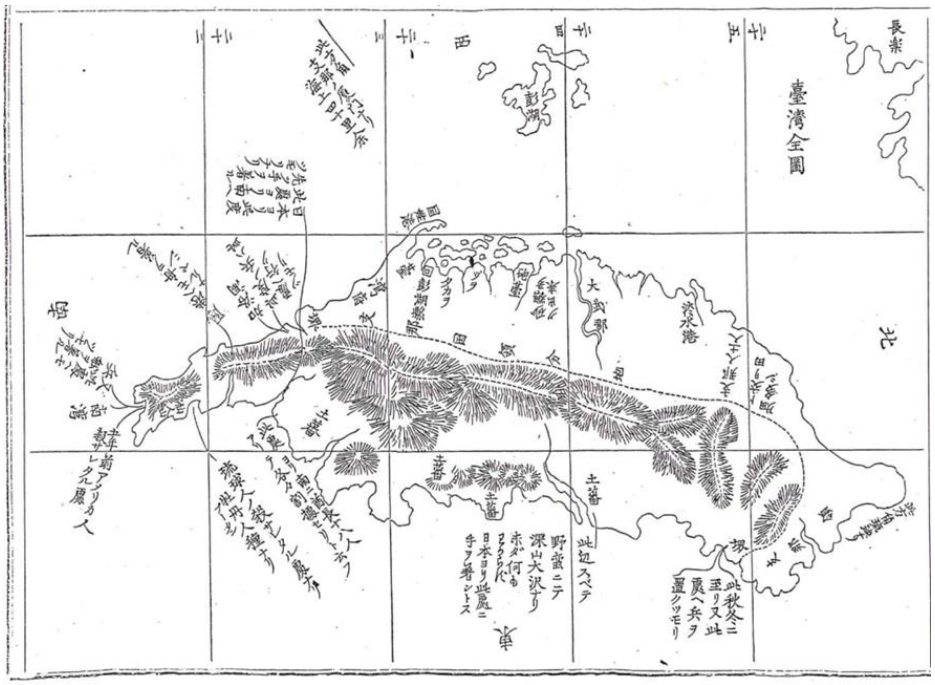
3-2「台湾手稿」を整理したもの

連載番号	日付	新聞号数	発信地	原文文字数	記事大小	内容
1号（手稿、以下いずれも号数なし）	8月5日	762号	東京	1422字	二段	連載の最初だけあって長文かつ力の入った文章。「私は台湾にいる二ヶ月の間、自ら山や川を歩き回り、風土を考察して見聞のままに筆に任せて記録したものが数巻ある」と書き出し、「蕃人の集落で雨を避け、ガジュマロの樹の陰で涼を

						取るなどの際に、苔のついた石の上に座り、鉛筆を握った」と記す。台湾全体の地理から始まり、戦場となった恒春半島の地図、軍の配置なども詳しく論じている。イラストあり（図8）
2号（手稾）	8月9日	766号	東京	1170字	二段	先住民「生蕃」事情を記述。ローバー号事件で登場する地元有力者のトキトクとイサについて書き、イラストもイサ夫妻としている。吟香の関心は先住民の服装や化粧に向き、詳細な観察を記している。イラストあり（図9）。
3号（手稾、前号の続）	8月10日	767号	東京	472字	一段	前回の「続」として漢化した先住民「熟蕃」について書く。イラストあり（図10）。
4号（手稾、前号の続）	8月12日	768号	東京	728字	二段	引き続き「熟蕃」の生態。水牛や黄牛の牧畜や豚の飼育、田畑について。6月の時点で吟香自ら新米を食べたことに驚いている。漁労の方法について、竹いかだの組み方を細かく解説している。イラスト２枚あり（図11, 12）。
5号（前号の続）	8月14日	770号	東京	528字	二段	「蕃地輸送」の記述。吟香は地理や交通に対して関心が強いようで、牛車の構造を詳しく書く。イラストあり（図13）。

6 号	8 月 16 日	772 号	東京	695 字	二段	漢化していない先住民「生蕃」18 村の人種的特徴について論じている。
7 号	9 月 22 日	804 号	東京	683 字	二段	先住民の武器文化について。先住民が多数の銃によって武装しており、日本の派兵軍を苦しめたことは知られているが、その実態について書いている貴重な部分。イラストあり（図 14）。
8 号（前稿の続）	9 月 27 日	809 号	東京	1048 字	二段	台湾出兵時最大規模の戦いとなった石門についての記載。吟香は「牡丹社そのほか山地生蕃地域に入るには必ずここを通らないとならない」と述べ、石門で、日本軍と先住民との間で戦闘が起きたことは意外なことではなかったとの見方を示している。イラストあり（図 15）。
第 9 号	10 月 5 日	816 号	東京	579 字	二段	台湾手稿の最終回だが、台湾信報と同様に最終回の告知はない。現地の植生について報告している。四重渓という土地で群生していたガジュマロの木について。イラストあり（図 16）。

3-3 イラスト、地図



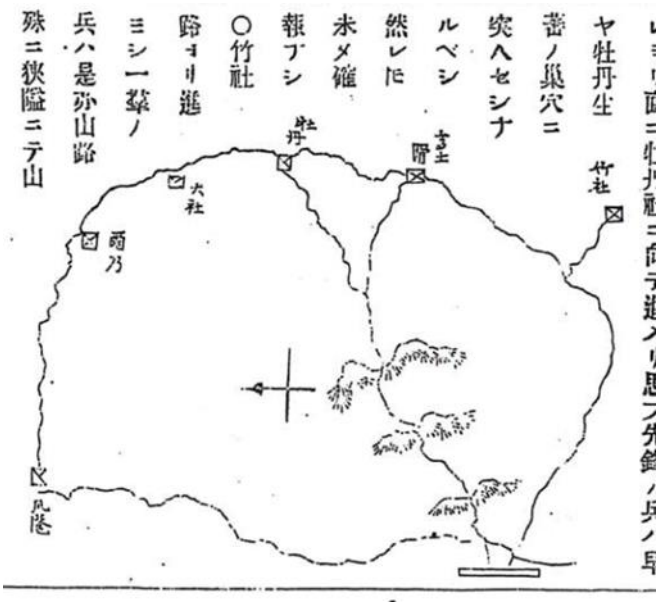
(図１：5 月 15 日「台湾信報」7 号／台湾全図)

(図２：6 月 10 日「台湾信報」13 号／日本軍が進駐した琅璃=恒春半島沿岸部)

15

(図３：6 月 12 日「台湾信報」14 号／「ナワタ」という樹)

15



(図 4:6 月 26 日「台湾信報」17 号／牡丹社一帯の地図)

16

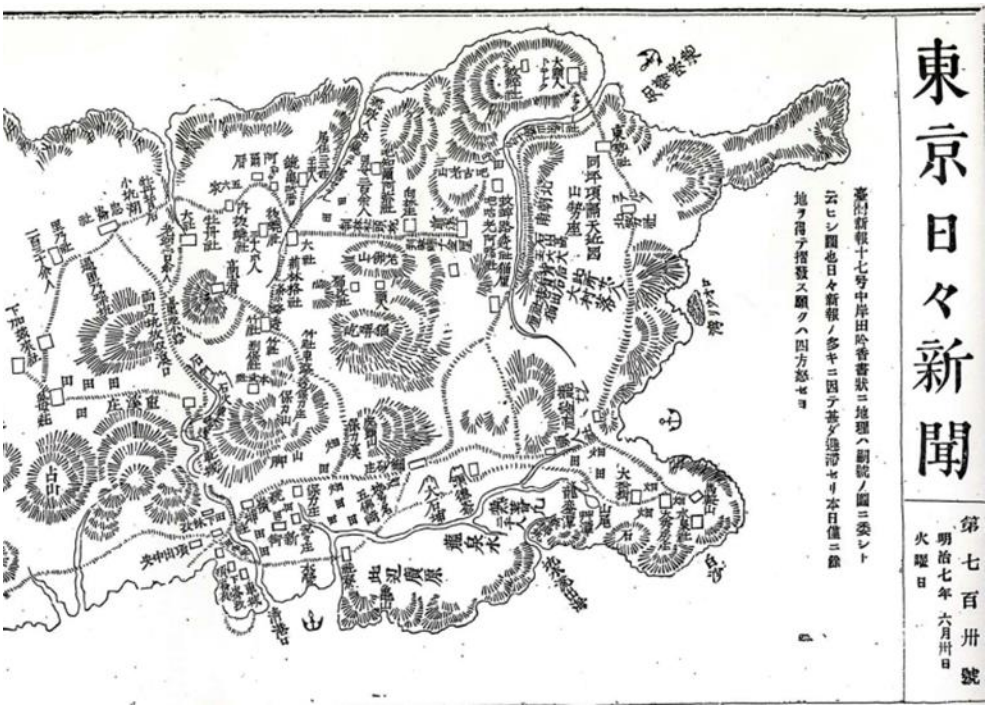
七年六月廿七日　蕃地事務局

追而附添人大澤忠吉儀モ相應之諸賄取計遣可申候也

○七百廿六号ニ記スル本月三日臺灣蕃地爾乃社人家燒却ノ節途中ニ立居シ小女ナリ卽チ前件ノ如ク大倉喜八郎ニ付托セラル見ル所年紀十二三歳許容貌太タ僻地山谷ノ民ニ異ナラズ耳朶ニ二顆ノ赤玉ヲ繫ギ眞鍮環ノ腕ヌキヲ掛ク麁布ニテ頭ヲ纏フ烏布ノ窄袖服ヲ穿タリシト今ハ日本服ヲ着セリ余輩見ル時相圍ンテ喋々セシモ睡テ覺メズ併シ覺ルモ更ニ悲喜ノ態ナク其性ノ愚魯ナル殆ト豚兒ノ蠢々タルガ如シ恐ラクハ感動

（図５：6 月 29 日「台湾信報」／日本軍のもとに置かれた少女）

16



（図６：６月 30 日掲載、「台湾信報」17 号付属の琅璚＝恒春半島地図）

（図７：９月 29 日「台湾信報」／清朝兵士の服装）

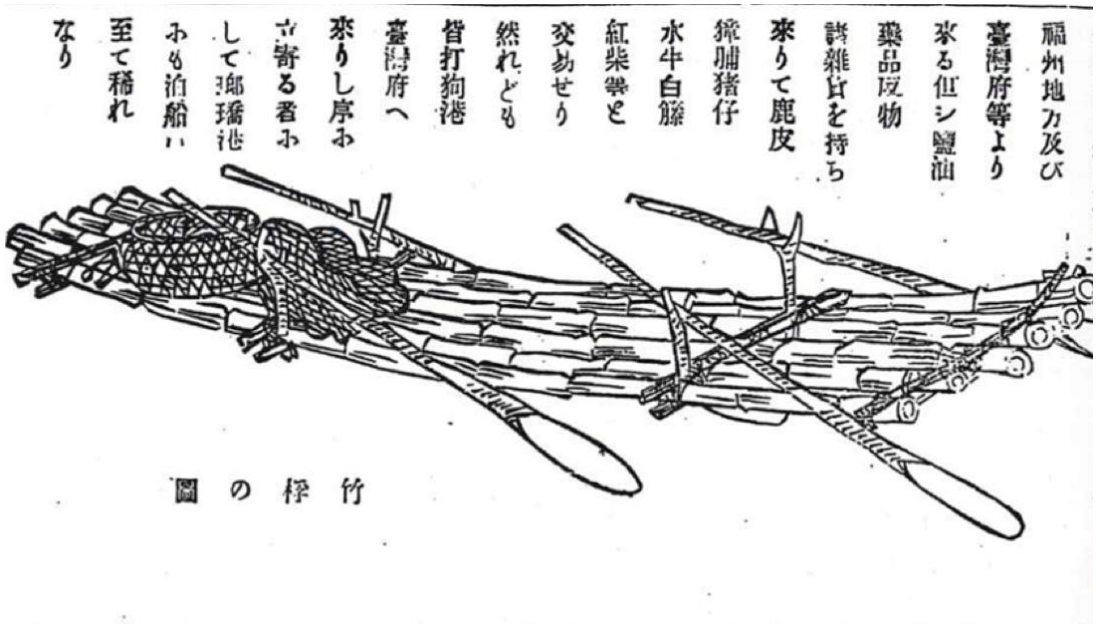
（図８：８月５日「台湾手稿」／「生蕃」の民衆）

（図９：８月９日「台湾手稿」／「生蕃」の男女）

（図 10:8 月 10 日「台湾手稿」／「熟蕃」の女性）

19

（図 11:8 月 12 日「台湾手稿」／台湾の交易船）



（図 12:8 月 12 日「台湾手稿」／竹いかだ）

20

（図 13:8 月 14 日「台湾手稿」／水牛がひく荷車）

20

（図 14:9 月 22 日「台湾手稿」／小銃などを持った「生蕃」の民）

21

（図 15:9 月 27 日「台湾手稿」／激戦地となった石門の地形）

21

（図 16:10 月 5 日「台湾手稿」／ガジュマロの樹）

3-4　分析

岸田吟香による「台湾信報」は4月13日から10月7日まで33回にわたって『東京日日新聞』に掲載された。この33回のうち、発信地は、1号から12号までは日本、13号から23号までは台湾で書かれ、さらに24号から33号までは、日本で執筆されている。1号から12号までは、主に長崎で台湾への出航を待っている間に執筆されたものだ。13号から22号までは、台湾の恒春半島の車城など日本軍の軍営を置いた場所での発信となっている。23号は台湾近海の船上で書いたものと見られ、24号から33号までは、日本で台湾取材時代の記憶や台湾からの書状などの伝聞などに基づいて書いている。この時点で台湾の戦闘はすでに終結しており、日本政府と清朝政府の和解交渉の行方を論じる部分も多い。

「台湾信報」において、記事の分量、頻度ともに劇的に高まったのが、岸田吟香が台湾に滞在した13号から23号までだった。台湾での戦況、現地社会の様子が詳細に描かれ、狭義での「戦争現地取材」という意味では、この期間に書かれたものがそれにあたる。

掲載される文字数がその回によってまちまちで、紙面上の扱いの段数も記事量によって変わっており、今日の新聞のように連載は通常字数がほぼ決まった形で行われるが、当時はそういった概念はなかった。文字数で最も短いものは10号の189文字。最も長いものは18号の3177字で、『東京日日新聞』の一面ほぼすべてを占めるほどの分量にあたり、当時の常識でも相当の長文記事であった。

一方、『東京日日新聞』紙上での連載名は「台湾新報」（29、30号）と誤記されたり、番号が書かれていなかったり（20号、29-33号）するなど、一貫した連載として編集部でどこまで位置付けられていたのか疑問の余地は残る。ただ、当時の新聞製作において、今日的な編集機能や校閲機能が十全に備わっていたとは考えられず、タイトルの誤記や番号の欠落があったとしても不思議ではない。

「台湾信報」は基本的に現地ルポの形式を維持している。その内容は、当然、台湾の戦況や兵士の様子の描写が主体ではある。台湾に到着後、岸田吟香の筆は一気に冴えを見せるようになり、険しい地形のなかで苦労しながら行軍する様子が見られる。

また「公文」と称して、現地の司令官などからの文章を掲載している。岸田吟香は大倉組の職員として台湾に行ったことになっているが、やがて軍部からの信頼を受け、従軍記者として認知されていった。当時は報道機関の倫理が普及していない時代であり、軍側の情報提供をそのまま掲載することにも抵抗はなかったと見られる。ただ、明確に岸田吟香の文章を「私文」とし、軍部からの戦況報告を「公文」と明確に分けている点などは、公的情報の取り扱いに一定のルールを意識した点が注目に値する。

一方、「台湾手稿」は8月5日の1号から10月5日の9号まで、すべて東京の本社で書かれたものと思われる。毎回の記事には「台湾信報」のような連載番号は打たれていない。2-5号や6-7号は続編という形になっている。

字数は総じて「台湾信報」よりも長く、特徴的なのは、ほとんど全ての回にイラストがついている点である。イラストは基本的に岸田吟香の手によるものと見られ、のちに企業経営で自作のイラスト広告を作るなど絵心のあった岸田吟香らしい個性の発揮があった。大正・昭和の洋画家として名高い岸田劉生は岸田吟香の子息であることも付記しておく。イラストのテーマは、現地の人々の風俗や生活、景色などが中心となっている。イラストは「台湾信報」にもあるが、ごく限られた回数であり、

台湾手稿でこれほどのイラストの多用が見られるのは、岸田吟香が台湾滞在中にすでにスケッチをつけた連載を想定して準備していた可能性がある。

イラストと記事を組み合わせている点など、新聞報道で一つの形式である「雑報」に通じるものがあり、のちに新聞報道の一つのスタイルとなっている「文字＋写真（イラスト）」の先駆である。記載の内容も「論」より客観的なファクトを重視したもので、「台湾手稿」3 号では、車城という恒春半島の中心地で見かける街の人々について、「白砂糖、黒砂糖、アヒルの卵、鶏卵、焼魚などをかついで売っている」「熟蕃は普段、豚肉とさつまいも、コメを常食としており、魚も少なからず食べる」と細かく描写している。また、「台湾手稿」8 号では、水牛が引く荷車について「車輪は厚い木の板 3 枚で作っていて水牛二匹か三匹で、引くあゆみは非常に遅いが、車輪の音は琴の音のようで高低に調子が変わって面白い」と活写している。

民俗学的な関心は「台湾信報」のころから表出していたが、「台湾手稿」ではさらに突出させた形で、例えば「台湾手稿」６号ではパイワン族ら先住民の特徴について「みな同一人種であり、その祖先はルソンかあるいは近隣の島国から漂着した者だろう。骨格をみるとマレー人でシナ人の容貌とは少し異なっている。しかし、いつからこの島に渡ってきたのか文字でこれを記す者がいないので詳しいことはわからない」と述べている。これは今日的な台湾先住民の起源論からみてもかなり正鵠を得た理解であり、この時点で吟香がどのような台湾先住民に関する情報源を持っていたのか気になる点である。

岸田吟香は「台湾の詳しい図誌を三冊作ってこれを近々出版し、世に出そうとしている。ゆえにいまここに載せるものはそのわずか一部のみ」と書いており、本人にとっては、手探りで書いていた「台湾信報」よりもこちらの「台湾手稿」のほうに対して、力を入れて書こうとしていたところがうかがえる。その後、図誌が出版されることはなかったが、それがいかなる原因であるのかは、その後の岸田吟香の資料で触れているものは見つかっていない。

通信インフラはメディアの海外従軍取材において報道条件を左右する重要事項だが、当時は船便に手紙を乗せて送ること以外に台湾から東京への記事送稿の方法はなかった。多くの記事が、執筆からかなりのタイムラグを経ていることも、今回の整理によって明確になった。長崎滞在時に書いたものは２週間程度で紙面掲載に至っている。当時、東京–長崎間の船便は 3 日程度で到着したことを考えると、いささか遅いという印象だが、船便の発着が不定期であったため時間がかかったとみられる。

台湾から東京への送稿についてはさらに時間を費やした。例えば、岸田吟香の台湾到着後の最初の回にあたる「台湾信報」14 号では、5 月 22 日に台湾の車城に上陸してすぐに執筆したと見られるが掲載日は 6 月 10 日となっている。所要時間は 20 日近くかかっている。7 月 7 日掲載の「台湾信報」22 号においても、6 月 17 日に台湾で執筆していることが記されており、20 日以上のタイムラグがある。台湾から日本への船舶が不定期であったことが原因だろう。

通常は 2–3 週間の時間をかけて東京の編集部に到着した様子であった。例えば、「台湾信報」17 号は、岸田吟香が 6 月 2 日に車城の本営から長崎に帰還する船に託して東京に送ったもので、東京日日新聞に到着したのは 6 月 24 日。それから 6 月 26 日の紙面に掲載されている。編集部における掲載までの効率はかなり高かった。「台湾信報」32 号は大倉喜八郎からの書状に基づく台湾現地報告であったが、書状は 9 月 10 日に台湾から出され、東京に 28 日に到着、29 日の紙面に掲載されている。

4. おわりに

本研究ノートは、岸田吟香従軍取材研究のための基礎資料を作るという意味でまとめたものであり、初歩的な分析は（3）の分析部分で論じた。

戦争に記者を派遣することは、現代の我々からすればごく普通のジャーナリズムの営為であるが、新聞すらない時代に育った世代に属する岸田吟香が、台湾出兵への同行取材を思いつき、実行に移したということ自体が当時のメディア環境のなかで特筆すべき出来事だった。

さらに、岸田吟香の「台湾信報」「台湾手稿」は、現地事情をこと細かく記録し、証明となるイラストもつけているなど、基本的に今日の新聞報道のスタイルに合致している。そうした報道方法の実践は、岸田吟香が海外ニュースを翻訳した『海外新聞』などの発行を手がけ、戦争報道や現地ルポを行なっている欧米の新聞に日頃から接した経験があったからこそ可能だったのではないだろうか。

また、岸田吟香が書いている文章は基本的に言文一致の日本語となっている。文体のみならず、執筆される文章の平易さは今日的新聞で普遍的に書かれる「雑報」「現地ルポ」に近いものがあり、日本の近代ジャーナリズムの文体確立にも貢献した可能性がある。

戦前の日本の新聞は、日清戦争、日露戦争、日中戦争へまるで倍々ゲームのように戦場派遣の記者を増やし、活発な戦争報道で部数を拡大させた。岸田吟香の台湾出兵報道はその嚆矢であった。従軍記者の戦争派遣による報道という形態のプロトタイプ（原型）が、岸田吟香の台湾出兵報道によって整えられたと考えるべきである。

過去、岸田吟香の台湾出兵報道に対する研究においては、台湾や先住民に対する植民地主義的な視線や帝国主義的な論調の負の側面を強調する論述が目立った。その指摘が間違っているわけではないが、今日的基準から当時の日本人の価値観を論じる意義については再検討が必要だ。不偏不党や人権重視などメディアの報道倫理が定着していない時代に、完璧ではないにせよ、客観的な現地事情の紹介に努めた岸田吟香の文筆には相当の先覚性が備わっていると言えるだろう。

今回の整理の結果、岸田吟香が「台湾信報」「台湾手稿」として執筆した台湾従軍報道は、合計本数で 42 本、文字数で約 4 万 5 千字（「台湾信報」37577 字、「台湾手稿」7325 字）に達する。一冊の書籍となってもおかしくない分量である。イラスト・地図も 16 枚に及んだ。これらをいかに今後の研究に生かしていくのかが次に問われるところである。

今後は本研究ノートで整理した基礎資料をもとに、より精度の高い従軍日誌を作成することが望ましいと考えている。そのためには、台湾出兵の時系列的展開を、公的資料等や既刊資料などで検証し、軍事作戦のなかでの岸田吟香の行動をより立体的に再現することが求められる。さらに、同時期に従軍したエドワード・ハウスや松崎晋二、さらに兵士や軍医らの記録を用いて岸田吟香の報道や行動を相対的に検証するべきで、最終的には近代日本初の対外出兵で初の従軍記者として参加した岸田吟香の報道が日本のジャーナリズム発展や台湾理解に与えた影響を今後の研究のなかで確認していきたい。

〈参考文献〉

草野美智子・山口守人，2001，「明治初期における日本人の「台湾」理解-台湾出兵に同行した従軍記者、岸田吟香の関連記事分析を通して-」『熊本大学総合科学研究報告』第４号，15-28

後藤新，2007，「台湾出兵における新聞報道とその規制」『法学政治学論究』74，1-34

エドワード・ハウス著、陳政三訳，2008，『征台紀事　牡丹社事件始末』台灣書房

田中梓都美，2011，「牡丹社事件を契機とする日本人の台湾認識の変化」『史泉』114，15-29

陳萱，2013，『明治日本における台湾像の形成―新聞メディアによる 1874 年「台湾事件」の表象』国立台湾大学出版中心

土屋礼子，2005，「明治７年台湾出兵の報道について-『東京日日新聞』を中心に-」、明治維新史学会編『明治維新と文化』吉川弘文館

『東京日日新聞』復刻版

毛利敏彦，1996，『台湾出兵-大日本帝国の開幕劇』中央公論社

森田峰子，1998，「写真師松崎晋二　台湾をゆく」『図書』589，17-21

森田峰子，2002，『中橋和泉町松崎晋二写真場　お雇い写真師、戦争・探偵・博覧会をゆく』朝日新聞社

Study on War Report by Kishida Ginkō

How Did He Deliver News From Taiwan at the First War of Modern Japan?

NOJIMA, Tsuyoshi

In the Meiji government's first overseas military deployment to Taiwan (1874), Kishida Ginkō (1833-1904) of the daily newspaper Tōkyō Nichinichi Shimbun was the only Japanese war correspondent to accompany the army. Kishida Ginkō's reports on the Taiwan expedition were innovative not only in terms of content, but also in terms of presentation format and style. While his reports appear to have had a significant impact on the early development of journalism in modern Japan, there are many aspects that have yet to be fully examined and considered in existing journalism research. The purpose of this research note is to gain an overall picture of the content investigated and written about by Kishida Ginkō, Japan's first military correspondent. The full text of the two serials "Taiwan Shimpō" and "Taiwan Shukō" was analyzed. These were respectively published in the Tōkyō Nichinichi Shimbun during and before Kishida Ginkō's stay in Taiwan. Aspects such as the date of publication, number of written characters, treatment, location from which they were sent, content, and illustrations attached to the article, were arranged in chronological order, and a basic analysis was added.

Key words：Kishida Ginkō, Taiwan Expedition, Tōkyō Nichinichi Shimbun、War Correspondent, Mudan incident